



世界の劇場から、こんにちは!

世界の歌劇場で活躍する日本人ダンサーを紹介します!

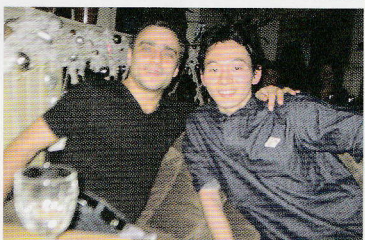
文・上野房子

ミハイロフスキー・バレエ

高野陽年さん

ドウアトが僕を見出してくれたから、今の僕がある。

学べることは学び尽くすつもりで日々精進!



(上)レッスン中。(中)レッスン終了後、教師のエフゲニア・コスティレワ氏と。(下)ミハイロフスキー劇場近くのカフェにてアンドレイ・バタロフ氏と。
Photos by Sako Ueno

2011年春、ロシア国内のバレエ団の芸術監督や採用担当者十数人が見つめるなか、ワガノフ・バレエ学校の卒業試験が始まった。終了後、ミハイロフスキー・バレエ(日本ではレニングラード国立バレエの名称が用いられている)の芸術監督ナチョ・ドウアトは、一人の少年に声をかけた。

「すごくよかったね」

ほどなくして同校の芸術監督(当時)アルティナイ・アスィルムラトワが少年を呼び出し、ミハイロフスキーから入団要請が届いたことを告げた。彼の名は、高野陽年。就労ビザの職業欄には「アーティスト・オブ・バレエ」と記されている。

「ロシアでは、文化にたずさわる人達をクリツウル・ヌイと呼んで、敬意をはらっているように感じます。ダンサーとして評価され、その一員になることがで

き、ほんとうに嬉しかった。ミハイロフスキーで学べることはすべて学び尽くすつもりで、日々、生きています」

ミハイロフスキーは、1833年に誕生したサンクトペテルブルクの老舗劇場で、年間のバレエ公演回数は約百回。レパートリーの中核は古典作品だが、ドウアトの現代作品にも果敢に取り組んでいる。

「いま、ミハイロフスキーは勢いのあるバレエ団だと思います。ナチョの存在が大きいですね。ダンサーは、いつだって新しい体験を求めていますから。僕自身、彼の作品を通して、コンテンツポラリーの面白さに開眼しました。ナチョの振付はとても音楽的で、踊っていて気持ちがいんですよ」

昨年12月に初演されたドウアト版『くるみ割り人形』ではファーストキャストに選ばれ、1幕のピエロとねずみ、2幕

の中国と花のワルツに出演。哀し気な表情でコロンビーヌに求愛するピエロ役では、彼の軽快な跳躍や身長182センチの涼やかな風貌が実に魅力的だった。

「ナチョの頭のなかにある振付を僕が実際に踊り、細部を調整しながら仕上げていきました。生気が抜けた操り人形らしく振る舞うように指示されたけれど、それ以外は特に何も言われていません。ナチョは、いつもそうなんです。言葉では説明しない。演技はバから自ずと浮かび上がる、と考えているので」

『くるみ割り人形』の公式の公演回数は19回。それ以外にも貸切り等の公演があり、オーケストラ付きの通し稽古も加えると、この1カ月で30回は舞台に立ったという。

「10時に劇場に入ってウォーミングアッ



ミハイロフスキー劇場。 Photo by Sako Ueno